



東高だより ーはなみずきー

第7号
(H23.5.27)

♪「人生にマニュアルはない」♪

教員としてまだよちよち歩きのヒヨコのとこのことだ。県教委からは非常勤で週33時間勤務と言われていた。ところが小豆島へ行ってみて吃驚。定時制勤務のうえにクラス担任ときた。随分話が違うじゃないの。まるで白い鳥が片足で立っているようなものだ。そうサギだ。当時は朝と夜の二部制で、勤務時間は優に60時間を超えた。サービス労働の雨嵐というやつだ。おまけに非常勤だからボーナスはない。ろくすっぽ仕事もしない年配教師が、「ほれこれ見て。ボーナスが立つよ」と自慢げに給料袋を立ててみせたのをいまだに覚えている。大学を卒業したばかりのういういしくて真正直な新米教師への励ましか、それとも当てつけか。とにかくバカバカしいやらアホらしいやらで、やせ我慢だったがその年配教師に向かって、「のらくろ2等兵」かそれとも「フィリック」かどちらか忘れたが、とにかくそんな顔して笑ってやった。ハッハッハッハ。

というわけで、当然その夜は憂さ晴らしの酒盛りとなった。夏前というのに蒸して暑かった。ただでさえやりきれないというのに、ますます腹が立ってきてやけ酒がすすんだ。

日本酒の瓶が1本、ビール瓶が20本くらい転がったところで眠気が襲ってきた。玄関のドアは開けっ放し。台所横の網戸は破れ怪物の舌みたいにべろんと垂れ下がっている。不用心このうえない。しかし、むさくるしい男を襲う物好きもいまい。酔いに任せ台所で寝入ってしまった。

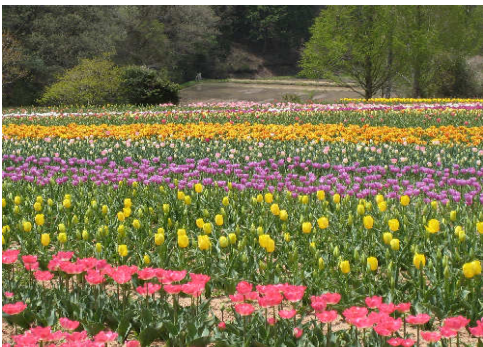
コトコト。なんじゃい。小鳥か？ 淋しい独身者を慰めに来たとでもいうのか。感心なやつじゃ。しかし、うら若き乙女ならともかく小鳥はな。これ以上安眠妨害すると焼き鳥だ。

ゴトゴト。なんじゃい。今度は狐か？ 無垢な若者をたぶらかしにでも来おったか。しかし、今ちょうど小百合ちゃんの夢を見ていたところじゃ。邪魔をするな。さもないと切り刻んで狐汁にしてくれようぞ。

トントン。今度はなんだ。鶴か？ まさか恩返しに。しかし、頭のはげたオヤジは助けたことあるが、鶴を助けた覚えはない。とすれば、サギ、か。おのれ羽を抜いて刺身じゃ。

ドンドンドンドン。その異様なドラミングに跳ね起きた。驚天動地という言葉があるが、そいつを見たとき心臓がピンポン玉くらいに縮み上がってしまった。

男の頭から鮮血がしたたっていた。手には包丁。これは夢だ。お前はまだ深い夢の中だ。小百合ちゃんと一緒に。安心しろ。そう自己暗示にかける。が、男は激しく台所の床を踏み鳴らし、半狂乱になって包丁を振り回す。包丁の刃が蒸し暑い空気をヒュッヒュッと切る。切り裂かれた空気の断面が冷たく凍る。ぞ〜っ。背筋が寒い。これは夢なんかじゃない。お前は殺される。



「この野郎！ 許さねえぞっ！」男が叫んだ。どくっ！ 心臓が口から飛び出しそうになる。「殺してやる！」男が迫ってくる。逃げろ！ しかし、悪魔の手が絡み付いたように足が動かない。男がさらに迫ってくる。瞳の奥に怒りの炎が燃えさかっていた。これで俺の人生も終わりか。

もうどうでにでもなれ。そう思った瞬間、男に飛びかかっていた。後のことは覚えていない。とにかく男にキックを食らわし、ぼこぼこに殴りつけたような気がする。気が付いたら手に包丁があった。男は、小鳥でも、狐でも、鶴でも、サギでもなかった。瀕死のパンダだった。

警察に引き渡すとき、男の狂気の沙汰については話さなかった。「どうも居酒屋で殴られたようですね。気の毒に」と、とぼけた。

翌日、男が訪ねてきた。すっきりとした表情で、前夜の面影はどこにもなかった。「ありがとうございました」男は何度も頭を下げた。「あのときあなたが止めてくれなかったら、今頃殺人者になっていたと思います。本当にありがとうございました」

前夜の会話が頭をよぎった。正座させた男に「おっさん、家族は？」「女房と娘が二人」「だったらこんな真似しちゃいけねえよ。男っちゅもんはよ。家族を大事するもんよな」手に包丁を握ったらこっちのもの。よちよち歩きのヒヨコが、随分としゃれた口をきいたものだ。

人生にマニュアルはない。想定外の事態にどう対処するか、機転を利かせて行動するしかない。それには机上のきれいな事は屁のつっぱりにもなりやしない。どろどろになって身につけた生きる知恵こそ物を言う。

参考まで言っておくと、男が振り回した例の包丁だが、メダカも料れないなまくらだった。

